



第146号

令和3年3月1日発行  
発行所  
長崎大学玉園同窓会  
〒850-0029  
長崎市八百屋町36番地  
☎095-824-5494  
発行人  
濱崎嘉一郎  
(株)昭和堂

# 「校長講話」に想う



新上五島町教育長

山本元之

退職して6年になるが、今でもあの時のことをよく思い出す。

そのこととは、校長講話が子どもたちの心を揺さぶり、校長の教育理念が実現されたことを実感できた、今から10年前の出来事である。

当時勤めていた学校の教育目標実現に向けた2学期のキーワードは、「鍛える」に負けてたまるかであった。

私は、全校朝会や学校行事での挨拶等、機会あるごとに子どもたちに諦めずに「負けてたまるか」という気持ちで最後までやりぬくことを求めていた。

そのような折、長崎くんち出場の機会が巡ってきた。前の年に地区の方から打診を受けていた私は、すぐ

に出場の意志を伝えた。それは、以前長崎市内に勤務していた頃、龍躍りに出場した経験があり、その時、これまで感じたことのない地域との一体感を味わったことと併せて、日常子どもたちに求めていることを自ら実行することで、何かが変わることを予感したからだ。担ぎ手最年長のハンディも週3、4回のウエイトトレーニングでカバーし、その時に備えた。

出場が正式に決定し、数日過ぎた10月5日(本番2日前)の全校朝会を「出場伝達」の場とした。

本番で着る衣装も見せながら、「普段みんなに言っていることを実行してきます。どんなに重くても、肩が外れそうになっても『負けてたまるか!』という気持ちで最後まで頑張るって担いできます。」このように伝えた。子どもたちは、目を輝かせながら聴いてくれた。

そして迎えた本番……。神輿はやはり重かった。ただ沿道には、子どもたちや保護者の方々、大勢駆けつけ声援を送ってくれた。校長冥利に尽きる時間であり、もうその時、神輿の重さはほとんど感じなくなっていた。

こうして、周りの方々の支えでやり遂げることができた私は、言いようのない充足感に満たされていた。そして数日後、報告の会をもった。「神輿はやはり重かったです。そんな重いものを担いで全速力で走っている時は、何かを叫んでないと耐えられませんでした。叫んだ言葉は、『負けてたまるか!』……。重くてどうしようもない時、皆さんの声援が大きき力になり、やり遂げることができました。」このように伝えた。

その後、長崎市内では各種大会等が開かれた。

**小体に出場した児童の作文**

「リレーで、となりのコースの人から『50メートル、何秒ですか?』と聞かれ、『8秒台です。』と答えました。その人が7秒台と知った私は、頭の上に石が降ってきそうでした。でも、校長先生が言った『負けてたまるか!』という思いで走りました。」

この大会で子どもたちは見事、陸上競技総合優勝を勝ち取った。

**小音会に出場した児童の作文**

「ステージに立つと『負けてたまるか!』この言葉が元気つけてくれました。」

## 課外クラブの活躍

### 野球部

負けてたまるか!  
がんばれ○○っ子

このような横断幕を保護者が掲げるなか、これまでは勝利に縁がなかったが県内・外の強豪チームを相手に快進撃を見せ、逆転サヨナラホームランのおまけもついた。

### ハンドボール部

九州大会に出場し、準々決勝では昨夏の全国大会ベスト8のチームと大接戦を繰り広げ、「九州大会ベスト8」に輝いた。

これらの成果は、偶然・奇跡であろうか。学校教育目標が単なる絵に描いた餅になることなく、発した言葉が確実に子どもたちの心に届いたことを実感した。それは、自らの体験をもとに子どもたちに語り、何事にも諦めずに挑戦していくことの大切さを厳しく求めたからであろう。これは、体験した者にしかできない。

9月末、教育長の職に就いた。教育長講話(挨拶)等は、児童生徒、教職員のみならず社会教育、生涯学習を含め、その対象は全町民に及ぶ。

あの時の「出来事」が偶然・奇跡ではなかったことを信じ、奮闘の日々である。

# 『主体的・対話的で深い学びの授業』を目指して

新学習指導要領の改訂では、子どもたちに新しい時代を切り拓いていくために必要な資質・能力を育んでいく観点から三点が重視されています。そのうちの一点として、『主体的・対話的で深い学び』の視点から授業を見直し改善することが求められています。

そこでは、学びの成果として、①知識及び技能 ②思考力・判断力・表現力等 ③学びに向かう力・人間性を身につけさせるためには、身につけた資質・能力が、様々な課題の対応に生かされることが実感できるような「学びの質や深まり」が重要である、といわれています。

つまり、「学びの質や深まり」に着目して、学習の内容と方法の両方を重視し、子どもの学びの課程を質的に高めるために、これまでの授業改善の取り組みを活性化していくことが、今回の改訂で目指すところだと考えます。

そして、このような「学びの質」に着目した授業は、新しい授業を作り出すことではなく、これまで各学校が校内研修等で、実践し、蓄積してきた子どもとらえ方や関わり方等学習や指導の在り方をふまえて、「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」の視点から見直し、工夫・改善の取り組みを進めていくことだといわれています。

そこで、本会報では各学校の取り組みの現状を出し合い、自校の取り組みと重ね合わせて、研修を深めていただければと考えました。

## プログラミングを活用した算数科授業



長崎市立西北小学校長

米原拓哉

若い頃、授業を組織する際に、先輩方から「それで子どもたちは本当に調べたい、と思うとね？」とよくつかれたものです。つまり、問題把握がしっかり出来ていなければ、主体的な解決学習には決して結びつかない、ということなのです。導入の難しさを思い知らされます。

またある時は「それでは試行錯誤どころか右往左往に終わるよ」と切り捨てられます。子どもがしっかりと見通しをもって活動しなければ、何も実を結ばない、子どもの深い学びには到底及ばない、という教えにほかなりません。

これらはまさに今、目の前にある新学習指導要領が示す求められる授業の在り方だと考えます。

不易と流行、恐るべし。時代は変われど、教育の根幹は何ら変わらないうちに改めて思い至ります。ただし、変わりゆく部分があることも、教育のもう一つの側面です。その一つがプログラミング教育でしょう。

本校では、3年前から、長崎市教科外部会（現在は教育研究会）情報教育・視聴覚部会の依頼を受け、プログラミング教育の実践研究を進めています。学校全体の研究は、長崎市教育委員会より「食育」の委託を受けており、プログラミング教育は視聴覚担当者が中心となって取り組んだものです。

プログラミング教育とは何ぞやということについては、3年経った今では随分周知が進んでいますので敢えて説明は省きますが、ここにも頻繁に問題解決的な学習のメソッドが組み込まれています。

令和元年度に本校で実施した5年生・算数の公開授業では、プログラミング・ソフトを用いて「多角形を描く」授業を、多くの参観者（市内小学校の視聴覚主任あるいは情報教育担当者、及び市内外の教育委員会担当者、テレビ局や新聞社等メディア関係者）に公開することができました。

子どもたちは2名に1台のタブレットを手に、プログラミング・ソフトのある程度の扱い方をレクチャーしてもらった後、思い思いに五角形を描くことにチャレンジして

いきました。この、ほぼ一人ひとりに操作できる端末が保障されている、ということとは「主体性」や「動機づけ」になくはならない要素であり、若い頃に身を粉にした教材づくりには匹敵します。子どもたちが集中して取り組んだことはいうまでもありません。

しかし、ある所まで進むと、子どもはたとえ困り果てます。ここに、問題解決的な学習の味噌が隠されています。強烈なインパクトを伴う問題把握を余儀なくされるのです。その時点までのプログラミングの情報では、図形がうまく描けません。五角形を描くつもりが、角を曲がるごとに、直線は外へ外へと進み、一向に図形が閉じていかないので。子どもは、ペアの相手と「ああでもない、こうでもない」と試行錯誤の上、とうとう内角ではなく外角を入力しなければ決して内側に曲がっていかないことに気づいていきます。このことを理解した子どもは、どんどんプログラミングの楽しさを享受していくことになりました。

このように、プログラミング学習活動を問題解決的な学習の手法にうまく導入することで、「主体的・対話的で深い学び」が実現できるように思います。

GIGAスクール構想も前倒しとなり、新しい時代の学習指導の在り方が目の前に迫っています。

## 自信と意欲をもち、主体的に学び合う生徒の育成

「学び合いの充実や深い学びを育む授業を通して」



諫早市立高来中学校長

濱本 耕吉

### はじめに

本校は、平成30年度より3年間、「学力向上」に係る諫早市教育委員会の指定を受け、研究主題「自信と意欲をもち、主体的に学び合う生徒の育成」「学び合いの充実や深い学びを育む授業を通して」を掲げ、話し合い活動を通して、生徒たちがお互いを認め合い、主体的に学習に取り組む授業の改善に取り組んできました。新学習指導要領も視野に入れ、教科を越えた協議を交え、人との主体的な関わりの中で、よりよい仲間づくりを企画し、行動してきました。できる生徒の育成を目指してきました。

### 1 具体的な取り組み

#### (1) 基礎学力向上 自主学習ノートの活用

家庭学習定着のための自主学習ノート活動に取り組みました。その際、宿題等を各教科間で調整しながら、その内容を具体的に示して定着を図りました。2、3年生は自分で学習する教科を決めました。

#### (2) 共学タイムの設定

基礎的・基本的な学習内容の定着を図るために、教師の学習指導と合わせて、生徒同士の教え合い活動を取

り入れた「自主学習時間」を設けました。  
2 「深い学び」につながる授業づくり

- アクティブラーニングの視点から「主体的で」「対話的で」「深い学び」につながる授業づくりのポイントを全教科で共通理解を図りました。
- 「めあて」「まとめ」を明示し、生徒が学習活動をイメージできるように工夫すること
- 意見を出しやすいう規模のグループを構成し、対話を通して話し合い活動を意図的に仕組むこと
- 多様な意見・考えが出せる課題設定や発問を工夫すること
- 生徒の主体性や学習の深まりをその場で評価すること
- 授業の振り返り（自己評価表等の利用）をすること
- 話し合い活動の約束事を設定すること

#### (3) 支持的風土の醸成

- ① コミュニケーションスキルトレーニング
- 生徒間のコミュニケーション力を高め、互いに信頼できる関係を育むことにより、よりよい集団作りのきっかけとなりました。
- ② ソーシャルスキルトレーニング
- 「ソーシャルスキルトレーニング絵カード」を教材として使用する。絵カードを見て、どの場面での

ように行動すればよいかを仲間と話し合い、具体的な行動を協議させました。

- ② 対話スキルトレーニング
- 「聴き方の達人」になるべく、話し合い活動を通して、その手立てを協議させました。実際に役割を決めて取り組ませることに伴って、聴くことの大切さを身に付け、普段でも意識できるようになっていました。

- (2) 自己肯定感の向上
- 自己肯定感を高め、生徒が集団の中でそれぞれ居場所を見つけ、安心して生活し、自分の目標に向かって挑戦できる環境を作るための活動です。各階に設置してある用紙と箱にそれぞれの「いいね」「ありがとう」と思うことを書き、投函させ、「お昼の放送」で発表させました。

- (3) 学習環境整備（メディアコントロール）
- 様々なメディアを自らコントロールしながら上手に使用することができるよう、PTAや各家庭と連携し、家庭での学習時間を確保し、規則正しい生活を送るために実施しました。

### まとめ

学力向上は、授業改善を基盤として生徒の実態に即した形で行われなければなりません。生徒は自身の変化や成長を発見することによって意欲を喚起し、自信をもって活動に臨むことができます。今後も学力向上に向けて生徒たちの学習意欲を喚起する手立てを示し、実態を把握し、試行錯誤を繰り返しながら研究実践を継続していきます。

# わたしの教育実践

## 学級への所属感を深める



佐世保市立相浦西小学校 八幡 駿 太

初めて教師として相浦西小学校の門をくぐった時に私の目に飛び込んできた言葉が「楽しい学校」でした。

その時から今日まで3年間どうしたら子どもたちにとって楽しい学校になるのか日々考えてきました。その中で私が心掛けてきたことは、「一人ひとりの学級への所属感を深める」ということです。低中高学年を経験し感じることは、先生に褒められたり、友だちから認められたりする体験が、子どもたちの居場所を作り「楽しい学校」へと繋がっていくと感じました。

私が子どもたちの学級への所属感を深めるために心掛けていることが二つあります。

一つ目は、学級目標を大切にすることです。学級目標を立てる時に、子どもたちと「1年間楽しかった」と、共感できる姿を想像しそこから目標を立てました。また視覚的にも

分かりやすいように、今日の目標を達成できた時には、ビー玉を貯めています。ビー玉が増えていくのを子どもたちと共に楽しみながら、学級全員で目標に向かって進むことができていると感じています。

二つ目が子どもと一緒に遊ぶことです。私は初任の時から、毎日子どもたちと運動場で共に汗を流しながら遊んでいます。子どもたちと触れ合いながら、褒め、許し、励ますこととお互いの信頼関係が構築されてきます。また、授業以外の新たな一面を子どもたちが見せてくれることがたくさんあります。年下の子に対してすごく優しい子。足は遅いけど、みんなを助けるために奮闘する子。きちんとその姿を私が褒め、学級全体で共有することで子どもたち同士の認め合いや笑顔に繋がっているように思います。

今年度も残りわずかとなりました。最後の日に子どもたちが笑顔で「楽しかった」と言ってくれるように、私自身も教師としての仕事を楽しみ、子どもと共に成長していきたいと思っています。

## 生徒の成長を支えるために



対馬市立難知中学校 梅野 郁乃

今年で2年目となる教員生活は、生徒から教わることの連続です。

日々成長し、変化し続ける彼らと接するうえで、私は次の二つの目標を大切にしています。

まず、学級経営では、「生徒同士が互いに認め合える環境を作る」とです。

私は、生徒の「他者を認める心情」を育むために、まずは教師である自分が生徒一人ひとりを大切にしようと思っています。

担任として生徒と接する中では、全員と向き合うことの難しさを感じることが多くあります。しかし、生徒が他者から認められる場面を増やすために、休み時間の会話や日記へのコメント、一人一役を基本とした役割分担などを意識して継続していきます。

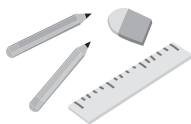
そして、短学活や生徒指導の場面では、他者との望ましい関わり方について話をするようにしています。特に、生徒指導の際は、自分は相手を大切にできていたか、という視点を反省を促し、その後の行動を一緒

に考えるようにしています。今後も、生徒が他者と認め合いながら成長していける環境づくりを意識していきたいと思っています。

学習指導の面では、生徒の「伝える力」を育むことを目標にしています。そのために、授業づくりの中で、「生徒が楽しんで他者と意見を交流する場面」を取り入れるようにしています。

自分の考えを他者に述べるためには、明確な根拠が必要です。その根拠を得るために作品を読み込み、獲得した知識をわかりやすく組み立てる過程を繰り返すことで、生徒の学力向上に努めています。

学級経営でも学習面でも、実践の効果をすぐに実感することは難しく、自信をなくすことばかりです。しかし、生徒のゴールの姿をイメージし、今の自分のできる努力を重ねることで、生徒の成長を少しでも支えることができればと思います。



# 『図書購入費助成事業』 子供による子供たちの図書室を



諫早市立高来西小学校 渡部素子

「本を借りてますか。」  
「本を読みましょう。」

図書担当である私は、クラスの児童に事あるごとにこう呼びかけていました。しかし、本を探しに来ても自分が読みたい本を見つけないことができず、手ぶらで帰る児童がいることも事実です。そこで私は、学校の中で図書室をワクワクする場所になりたいと思うようになりました。

## 選書をお供たちへ！

そんな折に、玉園同窓会から10万円の本を寄贈していただけたという朗報が届きました。せっかくの機会なので、図書委員会の子供たちにこの10万円を任せてみることにしました。

まずは、全校の子供たちが読みたい本の希望を取ることになりました。



付箋でいっぱいのカタログ



貸し出し初日の行列

ありつたけの本のカタログを子供たちの目につくところに置き、欲しい本に付箋を貼ってもらいました。広げたカタログにはたくさん付箋がついていました。また、クラスごとにアンケート用紙を配り、欲しい本を書いてもらいました。ある程度希望が集まったところで、図書室にあるものかどうかを調べ、無い本の中から希望人数が多い順に購入しました。子供たちからは「まだ、来ないんですか？」と心待ちにしている声が聞かれました。

めて思いました。今回購入できなかった本は、来年度の予算で購入しようと思っています。  
高まってきた読書欲を更に上げるために、次の2点に取り組みました。

## オープン図書室への改造

一つ目に行ったのは、図書室の様替えです。高来西小の図書室には「オープン図書室」という名前が付いているにもかかわらず、夏の暑さや冬の寒さのために壁は締め切りで、入口と出口まで決まっていました。

そこで、子供たちがいつでも入れるように壁を取り払い、中の様子が良く見えるようにしました。これで、図書支援の先生がいらつしやるか、また、他の学年が使用していかないか、何の本がどこにあるか見やすくなりました。ここでも委員会の子供たちが張り切って仕事をしました。

また、本棚の場所を移動し、入口の近くに全て並べました。廊下を通る時にも本が良く見えるようになりました。そして、学習するスペースを部屋の奥の方に移動し、落ち着いた雰囲気の本が読めるようにしました。本棚が移動したことで、本もすべて並べ替えましたが、古い本を廃棄したり、分類ごとに並べなおしたりと、自分が図書室にある本を再確認する上でも役に立ちました。



図書室奥の学習スペース



廊下から見たオープン図書室

## 本の宝くじ

二つ目に行ったのは、「本の宝くじ」です。読書月間に借りた本の登録番号をそれぞれ宝くじカードに書いておきます。抽選日には委員会の子供たちが当たり数字を引いていきました。当たった外れたと、大盛り上がりでした。プレゼントは、図書ボランティアさんにいただいたものや、本屋さんでいただいた付録などです。「また来年もしてくださいね」と子供たちからの要望が多かったため、ぜひ来年も続けていこうと思います。

これからも変化のある、ワクワク図書室づくりに努めていきたいと思っています。



宝くじ抽選の様子



玉園文庫と委員会の子供たち



# あの人は、今……

## バラの香りと共に

福岡県大野城市 増本 沢美  
(昭和56年卒)



退職後、区役所の人権教育推進員として勤務し、2年目の秋を迎えました。コロナ禍により様変わりした世の中において、これからの自分の生き方を見つめ直しているところと「退職したら海外旅行へ行くぞ」とはりきっていたのも束の間、全く行くことができなくなり、家で過ごす休日の増加。そこで考えたことは「日々の生活こそ、豊かに」ということです。

9年前、今は亡き病気の母を元気づけようと庭に5本のバラを植えました。その当時はまだ現役で働いていた頃で、薄暗い頃家を出て、月が空高く上る頃家に辿り着く。そんな生活でしたので、ゆとりをもってバ

ラの花を見ることもなく、咲く花の数も年々少なくなり庭は荒れ放題。

そして、緊急事態宣言からの自粛生活。今回、何より考えたことは、もう一度基本に返って「バラの育て方を学ぶ」ということで、地域の「バラ教室」に通い学び直しました。そこでは見た目ばかりを重視していたことが覆され、大事なことは「根」にあることに気づかされました。消毒ももちろん大切ですが、根を育てるため、根の周りを清潔にし、ふかふかの布団をかけるように常に土を柔らかくする。このことによって、空気が取り込まれぐんぐん育ち、蕾もたくさんできるといふことです。少々黒点病が見られても、秋にはこれまでで一番多くのバラが咲き誇りました。顔を近づけると何とも言えない香りが漂ってきます。

教育に関してもそうですが、見える所ばかりでなく、基礎となる「根」をしつかり育てることの大切さを今、バラを育てることを通して改めて感じたところです。

コロナの収束を願い、咲き誇る春のバラに思いを馳せながら、せつせと根の周りの土をスプーンで掘り返している今日この頃です。

## 「長崎さるくガイド 奮闘記」の出版

長崎市鳴見台 田中 威  
(昭和37年卒)



私は在職時代には植物分類に興味があったので、退職したら「長崎の道草を料理して食べよう」という本を出版しようと心密かに思っていた。ところが妻の友人のご主人がボランティア観光ガイドをされており、私も興味を引かれてボランティア活動の道を選び、すでにガイド歴20年になる。現在四つのガイドユニフォーム(さるく・平和・出島・軍艦島)を着こなし、ガイドにいそしんでいる。

ところで玉園同窓会の先輩の本を

好文堂書店で偶然見つけ、自分本を出版しようと思いついた。

たまたま書店に入る機会があり、私の本が書棚に並んでいるのを見て、気恥ずかしい思いをしながらほくそ笑んだことがあった。

今までに「長崎さるくガイド奮闘記」など3冊の本を出版しており、その中の一冊は国立国会図書館で永久保存にされている。

本を出版できたことは、人生の終末期に一つの節目ができていい記念となった。

きっかけをつかみ「思い立ったが吉日」と好奇心を失わず、前向きな姿勢を持ち続けたお陰だと思っている。目の前に困難があっても、一方に希望を持ち、そうやって私は今日まで生きてきた。

この年になると玉園同窓会の先輩とか同窓の仲間がだんだん黄泉の世に旅立って、淋しい思いがつのるこの頃であるが、これからは妻共々人生百年を目指し、残りの日々を大切に過ごしていきたい。

### 社会とつながりながら

長崎市琴海町 金谷 玲子  
(昭和52年卒)



38年間の教職生活を終えたのは6年前。ちょうど再任用制度が導入された頃です。私は定年と共に勤めを終え、これまでやれなかったことをやろうと決めていました。それは、次の三つです。

- 1、現役時代に支えてくださった地域の皆さんのように、私も地域の子どもたちを育む手伝いをする事。
- 2、自分の生活基盤である地域住民として生活すること。
- 3、健康管理に努力をすること。

今回は1を中心に述べます。まず、退職と同時に人形劇団「なづみ座」の会員になりました。現役の頃から学校に公演に来てくださっていた劇団です。会員となつて6年、裏方からはじめ少しずつ役もただけています。年間20を越える公演を行います。子どもたちに喜んでもらっています。

二つには「すいとるコンサート」というちよつと変わったネーミングのコンサートを企画実践しています。これはもう20年になります。送り手受け手が素人であり、地域住民であり、手作りであることに拘っています。「すいとる」好きの意味を込め音楽を通して琴海を元気にしたいと思っています。

三つ目としては、昨年やつと放課後子ども教室を立ち上げました。初任で勤めた学区です。生け花教室をその中に作りました。自分の学びとして続けていることを子どもたちにも楽しんでもらえています。花と向き合うゆったりした時間を子どもたちと共有できていることは嬉しいことです。

退職後を生き生き過ごすには、自由になつた時間を自分のためだけに費すのではなく、趣味を楽しみながらそれを社会に生かし何らかの形で貢献できる生活を送ることではないかと思っています。

地域住民としては、主人と共に自治会活動に参加し、頼まれることは積極的になを心がけています。

健康管理としては、水泳を続けることに努力しています。

退職して6年、今思うことは、やはり、社会とつながり、何か役立つことを、自分らしく行っていくことが大事ではないかということです。

### 無駄に動く

西彼杵郡長与町 宮崎 直子  
(昭和55年卒)



退職後は、高齢の母たちの事を考え、短時間の再任用を希望しました。

はじめは、短時間の中でどのように学校に貢献できるのか、毎年学校が変わる環境の変化についていけるのかと不安でした。しかし、新たな出会のチャンスが増えると思うと、毎年学校が変わることも楽しみなことと思えるようになりました。現役の頃は、いつも仕事に追われる日々。いかに効率よく動いて仕事をやり終えるかが課題でした。今は担任を持つことはなく、ゆとりができました。そこで「無駄に動いてみよう」と思いました。机間指導で無駄に多く歩き回る、隙間の時間に学校内を見て回る、電話の伝言メモを机に置くの

ではなく、口答で伝えるに行くなどです。どれも限られた勤務時間に子どもたちや職員とのコミュニケーションをとる大切な動きとなっています。出会えた先生方から学ぶことや、これまでの経験から自分が伝えられるものを探するのが楽しい3年目です。

家では、同居の義母や一人暮らしの実母の世話をしつつ、退職後2年ほど、ホットヨガにチャレンジしました。このコロナ禍で残念ながら今は断念。

現在は、長与町のポイントウォーキングに参加しています。近くでも、つい車で移動することが多かった私ですが、歩数を増やすために、せつせと歩くようになりました。おかげで、季節の草花の変化や風の匂い、行き交う町の人々の様子、近所の犬や猫、新しいお店など、これまで気づいていなかったものに、気づくことができようになりました。コロナに負けない体力強化を目指しながら美しい歩き方とは、いかなるものかとちよつと工夫もしながら、ウォーキングポイントの他にどんなポイントをゲットできるか楽しみました。今思っている今日この頃です。

# 母校だより

目録  
●  
●

## 近況便り

長崎大学教育学部長 松元 浩一



昨年の今頃から全国各地に拡散し始め、今もなお猛威を振るう新型コロナウイルス。コロナショックによる激動の一年が過ぎようとしております。教育学部同窓の皆様におかれましては、多事多端のなかにあつて、心よりお見舞い申し上げます。

新型コロナウイルスの感染拡大については、高解像度の映像を通じて、手による接触感染の様子を蛍光塗料で可視化し、思わぬところにウイルスが付着していることが報じられたり、くしゃ

みをしたとき、口から飛沫が飛び散る様をコンピュータで「見える化」して、感染のリスクに注意を促す場面が見られました。各種データのコンピュータ解析が一層進展し、見えないものが見えるようになり、さまざまな分野で、できるだけ可視化して客観性を追求しようとする傾向が加速しているように思われます。

一方で、感染拡大による医療関係者の懊悩、感染者の不安と差別に対する恐れ、外出自粛による人々の心の抑うつ等は、傍からは見えにくいものです。可視化されたものがある反面、人々の不安や生き辛さに耳を傾けると、外側に表面化しにくい心の内面がさまざまにあることがわかります。他者の思いを想像したり、気持ちを推し量ったりする心の営みは、情報を可視化しようとするデータサイエンスとは対極ではなく、対を成すべきように思われます。視覚に訴えて説得性を主張する科学の在り方やその教育と、見えにくい心の営みやそれを読み解くための教育は、

両者のバランスが求められるところで、ウイルスによって一変した今の社会では、後者が前者に追いついていない状況があり、その距離は愈々乖離していきそうな気配も感じられます。

だからこそ、哲学、倫理学、文学、道徳教育、社会教育、ふるさと教育など、心の豊かさやありようを問う教育・研究の充実が求められているように思われます。これまではなるべく人に知られないよう内々にしまっておいた心の機微を、これからは表出して皆で分かち合ったり、孤立せず他者や社会とつながり、結びつきを維持していこうとすることが「ポストコロナ」の社会で強く求められています。令和三年度本学が長崎県社会教育委員連絡協議会や長崎県教育委員会等と共催予定の「九州ブロック社会教育研究大会長崎大会・長崎県社会教育研究大会」は、これからの社会と地域と学校の結びつきを改めて考える機会として大いに期待されます。同窓会員の皆様のご参会を心よりお待ちしております。

さてここで、令和二年度後半の彙報を記します。まず人事異動についてです。令和二年度末をもって、藤木卓教授（技術科教育）、稲毛逸郎教授（英語科教育）

が定年によりご退職になります。永年にわたるご尽力に深く感謝申し上げます。心よりご健勝をお祈り申し上げます。

二点目は、この場をお借りして玉園同窓会のご支援に御礼を申し上げます。本年度も七月三十日より八月二十三日まで、玉園同窓会の先生方より、延べ一四六三名の学部生、大学院生が教員採用試験に関する教職講話、集団討議、個人面接の指導を頂きました。暑い盛夏の時期に、特に本年度はコロナ禍による厳しい制約のあるなか、連日、懇切丁寧にご指導いただきました。また、音楽、美術、科学教育に係る奨励事業や玉園賞授与による学生表彰も頂戴し、会員諸氏のご勤務校では、蓄積型体験実習等の受入れに温かいご配慮やお気持ちをご頂戴いたしました。ここに深く感謝申し上げます。

長崎大学教育学部、大学院教育学研究科（教職大学院）、附属学校園は一体となって、変わらず、長崎県の教育に貢献いたす所存です。

新型コロナウイルスの終息が待ち望まれるところです。教育学部同窓おひとりお一人が、どうかご無事で、御活躍くださいますようお願いいたします。



# 同窓会を応援しています ともに終身会員として

ご案内のように、本同窓会には3つの専門部が組織されています。各部とも、同窓会の活動・事業を推進し、同窓会活動の要となっています。その原動力となっているのが終身会員の方々です。

本同窓会の事業の一つであります、公益目的事業の一つとして、学生を対象にした「就業支援事業」を行っています。

本年度も、7月27日より8月26日まで約1ヶ月間行いました。受講生は述べ人数1642名のほり、多くの学生に期待されている事業だと自負しているところです。

ここでは、研修部を中心にして、終身会員の方々が講師として活躍をいただいているところです。

講師の方々の約38年間におよぶ教職経験を生かし、培って来た学級経営や学習指導、そして学校経営等、教育に対する熱い思いを、明日の長崎県の教育を担う学生たちに語っていただきました。

学生は、小論文・個人面談・集団面談等について学習を深め、教職に対する自信を深めたようです。

終身会員の方々の積極的な参加が、同窓会の事業を動かす原動力になっています。

4年間、長崎大学で青春時代を共にし、人生の中で最も輝いた思い出を共有している同窓生として、「玉

園同窓会」に対する熱い思いがあつてのことだと考えます。  
特に、本年度退職される会員の皆さんにとつては、ひとしおの思いがあるのではないかと推察いたします。いかがでしょうか。ともに終身会員になり、同窓会と共にこれからの人生を充実したものにしていかれてはどうでしょうか。



先生方へ(♡) / ♡♡♡♡♡♡♡♡  
今までたくさんのご指導、本当にありがとうございます。  
先生方の熱いご指導のおかげで、最後まで頑張ることができました。  
私も、試験を突破して、玉園の先生方のような教師になれるよう頑張ります。  
長崎小学校志望  
中学校家庭専攻 田中彩里花

玉園同窓会の先生方  
1ヶ月間、丁寧で親身にご指導していただきありがとうございます。  
先生方の1つ1つの指導が教職に向かうことにつながり、さらに教師への想いが強くなりました。絶対に教師になって先生方へ恩返しできるように頑張ります。  
中学校 理科 草野光祐



先生方へ  
毎日私達のために時間をたくさんかけてご指導して下さい本当にありがとうございます。いつも笑顔で励まし続けてくれたので、ここまで頑張ることができました。本番は今まで学んだことをしっかり発揮できるように頑張ります。また先生方のように優しく人に寄り添うことのできる教師になれるよう努力します。  
白石彩瑛

# 公益目的事業の募集

長崎大学同窓会は、一般社団法人として長崎県内をはじめとする教育振興に寄与することを目的としての活動を行っています。

この目的を達成するための事業として、長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対する図書購入の助成、及び長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業への助成を行っています。令和3年度も下記の要領で募集を行いますので、周知のうえで応募ください。

## 図書購入費助成事業

- 1 助成校 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校
- 2 助成額 1校につき10万円未満
- 3 募集期間 令和3年3月1日～6月30日
- 4 応募手続き

- ① 応募希望の学校は、電話(095-824-5494)で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
- ② 応募した学校へ「募集要項」を送付する。
- ③ 学校は、「申込書」に、「購入図書計画書」を添えて提出する。
- ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した学校に通知する。



(長崎市立三和中学校)

## 児童・青少年健全育成事業

### 1 助成の対象となる事業

- ① 児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化の継承・社会貢献などの実践活動
- ② 健全育成を目的として実施する、保護者・地域の指導者等の研修、学習活動

2 助成額 1件当たり5万円を上限として、総額20万円の範囲内で、対象とする事業の必要経費の概ね2分の1を限度とする。

3 募集期間 令和3年4月1日～6月30日

### 4 応募手続き

- ① 応募希望の団体は、電話(095-824-5494)で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
- ② 応募した団体へ「募集要項」を送付する。
- ③ 希望する団体は、「申込書」に「実施計画書」を添えて提出する。
- ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した団体に通知する。
- ⑤ 助成を受けた団体は、事業実施後、「実施報告書」を提出する。

お聞かせ下さい  
皆さんの声を

前略ご免下さい  
最近「たまごの」に特別支援  
学校関係の記事をまた  
見掛けなくなりました。特別  
支援学校退職者として少し  
さびしく思います。(今後の編集  
でよろしくお願ひいたします)

会報145号をお届けした直後、右  
記のような、貴重な声を頂きました。  
早速、広報部で検討をし、令和3年  
度(147号)で、「特別支援教育」  
について編集することになりました。  
楽しみに待っていてください。

会員の皆様にお願ひがあります。玉  
園同窓会は、更なる充実・発展を図り  
たいと考えています。  
そのために、会員の皆様の声をぜひ  
お聞かせ願ひたいと考えているところ  
です。  
玉園同窓会の活動について、また広  
報誌「たまごの」について、皆様のお  
気づき・ご意見、また教育課題や日頃  
の思いなど、お聞かせください。  
いただきましたご意見をもとに、玉  
園同窓会のあり方等について、広報誌  
「たまごの」の内容・構成等について  
会員の皆様と一緒に考える場にした  
いとと考えています。

・ 送り先 850-0029 長崎市  
八百屋町36番地 長崎県教育会館内  
FAX 095-824-1549